

研究紀要第22号

ひとりひとりを生かす保育

—「指導性」をみつめる—

1 9 8 6

島根大学教育学部附属幼稚園

は　じ　め　に

「子ども時代を失った子どもたち」は、アメリカの女性ジャーナリスト、マリー・ウィンが著した話題の本です。子どもたちの変わりようは、各国で状況の違いがあっても、いわゆる先進国で共通の問題でしょう。そして、子どもどうしが智恵を出し合いながら触れ合う遊び（子どもの文化）の大切さが、各方面で訴えられるようになりました。

今日、子どもばかりではなく、若者も大人も、人間としての生きる力が危なくなっているように思います。物の豊かさに慣れ、商業文化に支配され、変質した家庭や地域、あるいは特定の尺度による教育の中で、子どもたちは追いつめられ、大人も同じように現代社会の中であえいでいるのではないのでしょうか。今夏、十数年ぶりに訪れた沖縄や奄美でも、文明が本来の文化を変質させようとしているのではないかと感じました。

子どもの教育がさまざまな問題をかかえている時、本園では、私も含めて半数以上が新しいメンバーに入れ替わりました。長年積み重ねてきた「ひとりひとりを生かす保育」を土台としながらも、教育の原点に立ち帰り、私たちは何をしなければならぬかを探っています。前に本園の園長をされていた上田順一先生は、「個の深まりは集団への拡がりではなくてはならない」と申されました。「集団」を「人間らしい連帯」と置き換えてみますと、子どもの教育は、私たち自身の生き方や文化を問い直すことから始めなければならないのではないかと思います。

ここには、今日に至る研究の歩みと日常の保育の実践をまとめました。特に、本年度の課題としている保育者の指導性について、いろいろとご教示をいただければ幸いです。

昭和61年9月

島根大学教育学部附属幼稚園長

永 田 栄 一

目 次

ひとりひとりを生かす保育

総 論

「指導性」をみつめる	文責 野津 道代	1
I 研究主題について		1
1 主題追求の経過		1
2 これまでの研究紀要にみられる「指導性」		3
II 研究の歩み		9
III 研究の方法と視点		9
IV 第14次(61年度)の保育研究でとくに課題となったこと		10
1 「子どもの出方に即する指導性」のとらえ方		10
(1) 子どもの姿のとらえ方と「指導性」のつながり		10
① 総合的な活動としてとらえた飼育活動		10
② 素直な自己表現や個性的な表出を主体的な姿としてとらえる		11
(2) 「課題提示場面」のとらえ方		12
① 子どもの動きに即する柔軟性		12
② ひとりひとりのイメージを大切にする		13
(3) 活動の流れや節をとらえる		13
① 長期にわたる経験や活動の流れや節		14
② 「一日の活動」の流れや節		14
③ ある活動の流れや節		15
(4) 自由な雰囲気や、子どもの気持の流れを大事にする		16
2 ひとりひとりをみつめる姿勢の大切さ		17
(1) 「自分でみつけたこと」を大切にする		17
(2) 待つことの大切さ		18

各 論

子どもの主体的な姿を大切にする指導	野津 道代	19
子どもの気持や動きに応じたはたらきかけについて	今井 由起	46
ひとりひとりのイメージにそった遊びの支え方	小林 保恵	68
その子らしい姿を出させる指導	森山 純子	85
自然さを大切にする保育	星野 和美	107

研究同人

園	長	永	田	栄	一
副	園	柘	植	克	彦
研	修	野	津	道	代
教	部	森	山	純	子
	官	屋	野	和	美
		小	林	保	恵
		今	井	由	起
講	師	松	岡	美	佐
		德	永	直	子
前	園	米	原		美
前	教	玄	田	初	智
	官	奥	村	文	榮
		小	原	也	子
前	講	落	合	寸	子
	師	吉	岡	智	栄
		和	智	紀	子
				俊	幸